『十住心論義批』における一考察（二）

竹岸貢嗣

はじめに

本論は鎌倉期の華厳僧凝然（一二四〇年～一三二一年）の晩年の撰述である『十住心論義批』（以下「義批」[1]）に関する研究である。『義批』は現在、大谷大学所蔵本・真福寺所蔵本・高野山大学所蔵本・東大寺図書館所蔵本の四本の写本が伝えられている。『義批』に関しては既に幾つかの先行研究が発表されている。まず『義批』を最初に取り上げた先行研究として、小峰彌彦氏を中心とした十住心論義批研究会の研究がある。これは翻刻校訂を基本とした研究で『第四義批』全九巻の内の第三巻までに加え、『第四義批』『第五義批』『第六義批』に記される奥書を翻刻校訂した研究である。[2] また、拙稿において『第四義批』第一巻を取り上げ、その中に説かれる教理内容の傾向を指摘、後学への影響として江戸時代の亮海撰『冠註十住心論』[3]に見られる一文を新たな根拠として提示した。[4] これにより、凝然が真言密教を決して軽視はしていなかったことが改めて確認できたことに加え、『第四義批』『第五義批』『第六義批』全てにおいて深秘釈に対する注釈は行っていなかった可能性が高いことを推察した。

本論は前回からの継続研究であり、引き続き『第四義批』第二巻への考察を試みたものである。また、本論においては一部、頼瑜（一二二六～一三〇四年）の『十住心論聚毛鈔』の該当箇所を比較対象とし、『義批』における凝然の独自性を探る。[5]

一　『第四義批』第二巻について

先行研究において既に、凝然教学の基本的立場は「既存の仏教教学から逸脱しない事」と位置づけられている。[6]『第四義批』第一巻の引用論書に『大乗義章』[7]や『大智度論』[8]等の論書が多く見られることも、それら傾向の一端であると考えられる。

第一巻は、第四住心のほぼ前半部に関して注釈された巻であり主に、住心名の由来や声聞の名の解釈等、第四住心の大綱に関する解釈を中心としている巻である。[9] 続く第二巻は、第四住心における教理解釈を中心とする段階となり、引用される論書も、『瑜伽論』[10]や『倶舎論』[11]等の小乗教に直接関係するものが主となる。[12]

第二巻の内容は、大きく三段階に分けることが出来る。まず第四住心第五の門となる声聞の地位[13]が説かれる。次に『瑜伽論』と『倶舎論』との解釈の相違の概略が述べられ、見道に入る以前の段階として七方便、続いて四沙門果、最後が小乗教二十部の縁起並びに成立についての諸説を説く流れとなっている。最後の小乗二十部の段階は第三巻へ続く足掛かり的な部分ともなっている。文体の基本構造は第一巻同様『秘密曼荼羅十住心論』[14]（以下『十住心論』）の本文に沿って解釈を加え、適宜問答体を取り入れ論を進める形となっている。

二　『瑜伽論』と『倶舎論』との声聞地の異

『十住心論』の「瑜伽論ノ声聞地ト与ハレ倶舎論一広略ヲ為スレ異ト」部では、注釈で凝然は数ある小乗大乗の違いを二十の項目に分け説いている。主なものとしては、断惑の相違・六識に対する認識の相違・智障の認識・不退となる段階の相違・三分別と定散の対応の異などが挙げられる。これらは大筋の相違点であると説明し、詳細は以下の問答に譲っている。[15]

以下に展開する問答では、引用等も用いさらに詳細に大乗と小乗の教理の相違を明かしている。

問婆沙倶舎等ノ中ニ具ニ明ス声聞縁覚ノ行相ヲ。瑜伽雑集唯識等ノ中ニ亦説ク二乗ノ断証等ノ相ヲ同ク是レ一具ノ二乗修断ナリ。何故ソ彼此所ソ二不同ナル。答フ二乗ノ断惑修行等ノ相源ト出リ四阿笈摩ノ所説ニ。

問ふ。婆沙倶舎等の中に具に声聞縁覚の行相を明かす。瑜伽雑集唯識等の中に亦二乗の断証等の相を説く。同じく是れ一具の二乗断惑修行等の相源と四阿笈摩の所説に出り。

問フ何故ソ瑜伽等ニ所レ明ス声聞ノ行位ノ相而不ニ同ナルヤ彼毘曇等ニ耶。答フ不同ナル相トハ者有リ二義ノ意一。一ニハ為レ顕ンカ下小乗ニハ愚ニシテ於テ諸法ニ不了ノ説ナルコトヲ故ニ。二ニハ為ノ三方便シテ漸々ニ引ニ向ンカ大乗ニ故ニ。是ノ故ニ所レ明ス行位等ノ法ハ皆ナ悉ク方便シテ順ニ向シテ大ニ説カ故ニ不同ナリ也。既ニ非ス是愚法小乗ニ又非ス菩薩ニ。即チ知ヌ是レ彼ノ三乗教ノ中ノ声聞乗ナリ也已上。

問ふ。何故瑜伽等に明かす所の声聞の行位の相彼の毘曇等に不同なるや。答ふ。不同なる相とは二義の意有り。一には小乗には愚にして諸法に不了の説なることを顕んが故に。二には方便して漸々に大乗に引向んか為の故に。是の故に明かす所の行位等の法は皆悉く方便して大に順向して説くが故に不同なり。既に是れ愚法小乗に非ず。又菩薩に非ず。即ち知ぬ。是れ彼の三乗教の中の声聞乗なり。

問フ何故ソ前ノ愚法二乗ニハ無ニ頓出離一此ノ中ニハ有ルヤ耶。答フ為レ顕ンカ前ニ劣ナルコトヲ故ニ。此ハ超ニ過セリ愚法二乗一ニハ。無クシテ此ノ勝智一顕シテ彼ノ教劣ナルコトヲ方便シテ漸ク引テ超テ彼ノ勝欲ヲ令ム捨テ小ヲ従ハレ大。故ニ作ス是ノ説ヲ一。

問ふ。何故前の愚法二乗には頓出離無に此の中には有るや。答ふ。前に劣なることを顕んが為の故に。此は愚法二乗には超過せり。此の勝智無くして彼の教劣なることを顕して方便して漸く引て彼の勝欲を超て小を大に従は令む。故に是の説を作す。

以上のように大乗と小乗の教理の差がどういった点にあるのかを説いている。初めの問答は小乗仏典と大乗仏典に説かれる声聞・縁覚二乗の行形態は同じく一具にて説かれるものであるのになぜ同じではないのかという問いである。これに対し答では四阿笈摩[16]に説かれる説に則るとしている。

次の問答は瑜伽と毘曇では声聞の行位が同じでない理由を説いている。答えとして二つの意義を説いている。一つめの理由として、小乗における法は愚法であり未完成の法であることを表すため。二つめの理由として、最終的に大乗へ向かわせるための手段として様々な方便を使うため単純に同じ行位を経るとは限らないことを明かしている。続く次の問答では、小乗の二乗と大乗の二乗とで頓出離の義の有無に関して解釈する。ここでは前（小乗）を愚法とし、頓出離の義は小乗の義を超えているとしている。大乗においてはこの義を基に小乗より大乗へ向かわせる旨を合わせて述べている。

基本的に第四住心のこの部分は小乗（主に毘曇や倶舎）と大乗（瑜伽等）

との両方にて説かれる声聞・縁覚の行位の相違を述べる箇所である。どの問答においても、小乗における声聞・縁覚の義は未完の義であり、大乗における声聞・縁覚の義は大乗に至るための方便・入り口として解釈されている事が共通の項目としてあげられている事が分かる。

また、後の二つの問答は、問い、答えともに『華厳五教章』からの引用である。第一巻でも見られた傾向であるが、重要な教理に関しては自らの言葉ではなく先徳の論書等に依って解釈している。以上の問答でもこれらの傾向が同様であると確認できるものである。

三　『義批』における七方便・四沙門果について

七方便とは、見道に至るまでの段階で七賢とも呼ばれるものであり、停心・別相念住・総相念住・煖善根・頂善根・世第一法の七段階からなる。四沙門果は須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果の四種[17]である。ここにおいて『義批』の特徴として挙げられるような点は特には見受けられない。停心から世第一法に至るまで凝然の基本的立場である「既存の仏教教学における理解」の範囲に留まるものである。但し、唯一特徴を挙げるとすれば、七方便・四沙門果に限ってはほとんど引用経典・論書が使われていない点が挙げられるかと思われる。『第四住心』第一巻において教理解説を行う場合多くは『大乗義章』や『大智度論』と言った論書を使用し、種々の問答の答えをそのまま引用文にて解説する場合も多く見受けられたが、この段に関してはほぼ自らの言葉で解説を行っており引用箇所は数ヵ所しか見られない。前巻までにこういった傾向があまり見られないことから、第二巻以降の考察において新たなポイントになるものと思われる。

四　小乗二十部について

この部分については引用される経論の傾向が大きく変わり、主に『文殊師利問経』[18]『異部宗輪論』[19]『異部宗輪論述記』[19]等が用いられるようになる。『文殊師利問経』が多分に引用されていることに関しては『十住心論』自身にて引用されている点はもちろんであるが、その他『義批』の中でも触れられている。

問フ言テ三宗輪論等ニ有リト二十部一不レシテ出サ彼ノ文ヲ而モ引ク文殊問経ヲ有ラン何ノ所以カ。

答広相起因具ニ在リ宗輪ニ。亦タ是レ已起ノ乗諍分部所レ列スル分明ナリ。故ニ全ク依レ論ニ。文殊問経ニ具ニ列ネ部ノ名ヲ更ニ作テ偈頌ヲ総摂シテ明レス之ヲ。亦タ明スカ大乗所流ノ相状ヲ故ニ引テ経ノ頌ヲ顕レス無キコトヲ是非一。又文殊問経十八ニ二十ハ是レ仏ノ懸ニ記シタマフ未来ニ応ニシトレ起ル。[21]

問ふ、宗輪論等に二十部有りと言て彼の文を出さずして而も文殊問経を引く。何の所以か有らん。

答ふ広相起因具に宗輪に有り。亦た是れ已起の乗諍分部列する所分明なり。故に全く論に依る。文殊問経に具に部の名を列ね更に偈頌を作て総摂して之を明かす。亦た大乗所流の相状を明かすが故に経の頌を引きて是非無きことを顕す。又、文殊問経十八に二十は是れ仏の未来に起るべしと懸記したもう。

この一文によれば、部派分派の起因等に関して『異部宗輪論』が最も詳細に説いており、凝然もまたこれに依っていることが示されている。『文殊師利問経』は詳細に説かれるそれらの分派の状況と、十八部と本の二部は、大乗より出でていることを簡潔に頌にまとめている事などを根拠としていることが分かる。

また『異部宗輪論』と『文殊師利問経』の関係について『義批』では「我説未来起」の注釈箇所にて次の様に触れている。

言フ我説未来起ト者如来懸カニ記シ玉ヘリ未来ノ之事ヲ。如シ仏ノ懸記ノ。実ニ有リ此ノ事ニ。故ニ二十部ニ有リ懸記ノ事。有リ已起ノ事。文殊問経ト舎利弗問経トノ二十部ハ者並ニ是レ如来ノ未来記ナリ也。彼ノ宗輪論ノ二十部ハ者是レ已起ノ事ナリ。与レ仏懸記一契合相応シテ無シ有ルコトニ違背一。[22]

我説未来起と言ふは如来懸かに未来の事を記し玉へり。仏の懸記の如し。実に此の事有り。故に二十部に懸記の事有り。已起の事有り。文殊問経と舎利弗問経との二十部は並に是れ如来の未来記なり。彼の宗輪論の二十部は是れ已起の事なり。仏の懸記と契合相応して違背有ること無し。

『文殊師利問経』と『異部宗輪論』は、これから起こる未来の出来事を記したものと、既に起こった過去の出来事をまとめたものという違いがあるものの、基本的には相違ないことを述べている。[23]そのため『異部宗輪論』は『文殊師利問経』と変わらない位置の論書として『義批』においても度々引用されている。

この他、『義批』では度々『文殊師利問経』が如来が未来起を予測したことを表した経典であることを重ねて説いている。例えば、

元照云。無シトハ是非一者経ニ云ク。仏告ハク文殊師利ニ。未来ニ我弟子有リ二十部一。能ク令レ住二二十部一者ノ並ニ得二四果ヲ三蔵平等ナリ。無シ下中上一譬ハ如シ海水ノ味ニ無キカ有ルコト異。如二人ニ有レ二十子一。其レ実ニハ如来ノ所説ナリ。懸記タマフ滅後ニ故ニ云フ未来起ト已上[24]

元照の云く。無是非とは経に云く。仏文殊師利に告はく。未来に我が弟子二十部有り。

能く二十部に住せしむ者の並に四果を得、三蔵平等なり。下中上無し譬ば海水の味に異有ること無きが如し。人に二十子有る如し。其れ実には如来の所説なり。滅後を懸記したまふ故に未来起と云ふ。已上

文殊問経ニ云ク十八及ヒ本二ニ皆ナ従リ大乗一出ツ。[25]

文殊問経に云く。十八及び本の二に皆な大乗従り出づ。

以上、初めの「我説未来起」の注釈部に加え、これら二文からも窺えるように凝然は、部派各派の縁起由来を説く中で、『文殊師利問経』が如来が未来を予見し述べた経であることを合わせて主張していることが分かる。[26]

これ以降の部派分派についても『義批』は専ら『文殊師利問経』『異部宗輪論』を中心とした論の展開を行っている。またこの箇所においても前項目同様に重要概念の解釈に関しては、論書・経典の引用を用いることによって論を展開していることが分かる。

以上は小乗分派に関して述べる前の段階として、小乗分派が如来によって予言されたもの（未来起）であり、且つ『異部宗輪論』によってそれら予言が現実に起こった過去の事であるということを主張している箇所をまとめたものである。

次に述べる点は、それらを受けて小乗二十部の分派の様子に関して説いている箇所である。

『十住心論』本文は『文殊師利問経』に従い、八句の頌を掲げている。これを釈し『義批』では如来在世の時に如来が声聞に四諦十二因縁等の法を最初に示してからの分派の一連の流れが順を追って説かれている。

如来の未来起たる所以を述べた後、中盤において『文殊師利問経』と『異部宗輪論』における小乗各派の呼称の相違を列挙している。[27]また二十部の梵漢の表記対校をこの後に行っている。[28]これらは『文殊師利問経』と『異部宗輪論』との解釈に差異が無いことを改めて説いたものと思われる。

この箇所における最後の問答は部派の分部の解釈に幾種あるかというものである。『義批』では二部・五部・十二部・十八部・五百部の六種であると説いている。[29]これは賴瑜と同じ解釈である。賴瑜も『十住心論衆毛鈔』において同様の解釈を述べている。

凝然はさらに各説を詳細に説いており、六種ある解釈それぞれに異説

が存在していることを加えて解説している。[30]

この巻において特徴的な記述が見られるのが、最後部の「具釈如余」に関する解釈である。この一節は『十住心論』において『文殊師利問経』の八句の頌の解釈について他の論書に譲るとしている部分であるが、これについての解説に頼瑜との相違が見られる。

頼瑜は「具釈如余」は『異部宗輪論』を指しているとしている。[31]また対抗する説として『三論玄義』[32]『義林章』[33]の説を挙げている。これに対し凝然は慈恩大師の『異部宗輪論述記』、元照の『四分律含註戒本疏行宗記』[34]、懐素の『開宗記』[35]、定賓の『飾宗義記』[36]、大覚の『四分律行事鈔批』[37]、景霄の『簡正記』[38]を該当論書として指摘している。頼瑜が指摘している論書と凝然が指摘しているものの間に相違が見られるのは、『十住心論』の本文において「釈余如」と特定の経論を指摘していないことも大きな要因として考えられる。それだけに各諸師の立場を準じた説が立てられているものと思われる。また、この部分において挙げるべき点は、定賓は懐素を批難したという相対した立場にある人物であるにも関わらず、凝然が両師の名を並記していることである。ここには様々な論書を掲げることにより多くの理解を提示しようとした凝然の姿勢があるのではないかと思われる。

まとめ

本論において扱った範囲は前巻に比べ、諸師との見解の相違を中心とした特徴はそう多くはないと言えるかと思われる。しかしながらそれは、凝然の持つ「既存の仏教教理に基づく理解」という視点から外れないものであることが指摘できる根拠と言えるものである。声聞地の基本理解に関して『倶舎論』に基づいて解説を行ったり、部派分派の様子を説く範囲においては『十住心論』に引かれる『文殊師利問経』や対としている『異部宗輪論』を基本とした引用を展開し論を進めていることはその点を表している大きな特徴である。

これらの点から『第四義批』第二巻においても第一巻に見られた「確かな論書・経論に依る」という点が確認されたと共に「既存の仏教教学理解に基づく」という凝然の基本姿勢も合わせて確認することが出来たと言えるかと思われる。しかしながら最後の部分の「愚釈如余」の注釈において独自のものと思われる論書を挙げていたことは、凝然の思想背景を探る手がかりの特筆すべき点の一つとして今後重要な手がかりになると思われる。

第一巻において『大智度論』『大乗義章』を中心に論を展開していたこと、また今回第二巻において見られた新たなポイントを踏まえた上で今後の『義批』考察に生かしていきたいと考える。

『義批』は未だ大部分が翻刻の済んでいない未刊の文献である。今後、翻刻を進めることによって、鎌倉期に活躍した凝然がどのような思想を『義批』に記したのか、その全貌を明らかにして行きたいと考える。

註

(1)『十住心論義批』は『第四義批』『第五義批』『第六義批』『第九義批』からなる論書である。『十住心論義批』全体を指す場合は『義批』と略すが、四・五・六それぞれ単体を指す場合は『第○義批』と表記する。

(2)写本の現存状況等については、小峰彌彦「『十住心論義批』の研究（一）――未刊写本『義批』の紹介並註釈――」（大正大学研究紀要第六八輯昭和五九年）に詳しく報告されている。また、翻刻校訂には大谷大学図書館所蔵本、智積院所蔵本、高野山大学図書館所蔵本をテキストとして使用している。よって東大寺図書館所蔵本は対校では使用されていない。

(3)『智山全書』第七巻収録
(4)『豊山教学大会紀要』第三七号（二〇〇九年三月）
(5)凝然と頼瑜は直接交流したという記録は残されていないが、木幡観音院真空（一二〇四年～一二六八年）の下で同時期に居住していたことが推察されている。
小峰彌彦「『十住心論義批』の研究（二）」（大正大学研究紀要第六九輯　一三六頁参照）
(6)藤丸要「凝然教学の根本的立場」（『仏教学研究』第五六号二〇〇二年）等
(7)『大正蔵』第四四巻　No.1851
(8)『大正蔵』第二五巻　No.1509
(9)注釈範囲は『定本弘法大師全集』第二巻　第四住心冒頭～一五三頁七行目まで
(10)『大正蔵』第三〇巻　No.1579
(11)『大正蔵』第二九巻　No.1558
(12)『定本弘法大師全集』第二巻　一四九頁一一行目～一五三頁七行目「具釋如レ餘」まで
(13)受三帰地・信地・信法地・内凡夫地・学信戒地・八人地・斯陀含地・阿那含地阿羅漢地の十地。
(14)『定本弘法大師全集』第二巻収録
(15)如レ是ノ等ノ異大小二教種々無量ナリ。不レ可二勝計一ス。今ハ且ク大途広略ノ異ノミナリ耳。小峰彌彦「『十住心論義批』の研究（二）」（大正大学研究紀要第六九輯　一四一頁下段）
(16)四阿含に同じ。長阿含・中阿含・雑阿含・雑一阿含の四種。
(17)『長阿含』に表記される四沙門果。
(18)『大正蔵』第一四巻　No.0468
(19)『大正蔵』第四九巻　No.2031
(20)『卍続蔵経』第八三巻
(21)小峰彌彦「『十住心論義批』の研究（二）」（大正大学研究紀要第六九輯　一五〇頁上段）
(22)右同　一五一頁上段
(23)但し『文殊師利問経』と『異部宗輪論』とでは訳語は訳人によって異なるとして、対応する二〇部各部の表記を本文の中で対校している。
(24)小峰彌彦「『十住心論義批』の研究（二）」（大正大学研究紀要第六九輯　一五〇頁下段）
(25)右同　一五〇頁下段
(26)ちなみに同時代の真言僧としてしばしば名前を挙げられる頼瑜（一二二六年～一三〇四年）の書『十住心論衆毛鈔』（『真言宗全書』第一〇巻収録）においても『文殊師利問経』巻下 分別部品より、
爾時文殊師利白レ佛言。世尊佛入涅槃ノ後未来ノ弟子云何諸部分別。云何根本部佛告二文殊師利一。未来ノ我弟子有二二十部一。能令二下諸法一住上。二十部並得二四果ヲ一。三蔵平等ニシテ無二下中上一。譬ハ如ク二海水ノ味無キカ一レ有ルコトレ異。如シ三人ニ有ルカ二二十子一。真実如来ノ所説ナリ。
という一文が本文が引用されており、『義批』と同様の部分を部派分派の根拠としようとしていることが分かる。
(27)『文殊師利問経』→『異部宗輪論』
執一語言→一説部　出世間語言→説出世部　高狗利柯→鶏胤部
只底舸→製多山部　法勝→法上部　賢→賢冑部　一切所貴→正量
苏→密林山部　大不可貴→化他部　法護→法蔵部　迦葉毘→飲光部
修始路→経部　等。
(28)『文殊問経』『異部宗輪論』対校、部派各派名梵漢対校は、小峰彌彦「『十住心論義批』の研究（二）」（大正大学研究紀要第六九輯　一五一頁

上段～一五一頁下段）

(29) 小峰彌彦「『十住心論義批』の研究（二）」（大正大学研究紀要第六九輯　一五二頁下段）

(30) 二部説に二種。五部説に二種。一二部説は一種。二〇部説に三種。五百部説に関しては　その名のみが存在し相状に関しては明らかでないとしている。

(31) 『十住心論衆毛鈔』真言宗全書第一〇巻二四〇頁下段参照
具釈如余ト者指二宗輪論一。彼経論具二明二二十部ヲ一故。

(32) 『大正蔵』第四五巻　No.1852

(33) 『大正蔵』第四五巻　No.1861

(34) 『卍続蔵経』第六二巻

(35) 『卍続蔵経』第六六巻

(36) 『卍続蔵経』第六六巻

(37) 『卍続蔵教』第六七巻

(38) 『卍続蔵教』第六八巻